

博士学位論文審査要旨

氏名	李 干
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）
学位記番号	博甲第 282 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	台湾原住民セデック族の文化変容とアイデンティティ ー西部タックダヤ語群を中心にー
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 小 熊 誠 副査 神奈川大学 教授 周 星 副査 神奈川大学 准教授 後田多 敦 副査 神奈川大学 教授 泉 水 英 計（経営学部）

【論文内容の要旨】

本論文は、台湾南投県の中央山脈西側に居住する西部タックダヤ語群を中心に、セデック族の文化とアイデンティティ、そして特有の死生観、世界観と価値観が時代の流れとともにどのように変容してきたかに焦点をあてて考察を行った。

目次は、以下の通りである。

序章

第 1 節 セデック族の概況と構成

第 2 節 研究背景と問題の所在

第 3 節 課題設置

第 4 節 研究の視点と方法

第 5 節 調査地の選定と概況

第一章 セデック族の民族識別

はじめに

第 1 節 先行研究と問題の所在

第 2 節 セデック族の分類史と正名運動

第 3 節 セデック族正名運動における社会問題

おわりに

第二章 セデック族の出草（首狩り）風習

はじめに

第 1 節 先行研究と問題の所在

第 2 節 出草の定義と起源伝説

第 3 節 首狩りという文化と目的

第 4 節 「首」を切る理由

第5節 出草の道具

第6節 出草の流れ

おわりに

第三章 セデック族の文面（顔面入れ墨）文化

はじめに

第1節 先行研究と問題の所在

第2節 文面の条件

第3節 文面の起源伝説

第4節 文面の施行

第5節 文面の紋様

第6節 現代社会におけるセデック族の文面

おわりに

第四章 セデック族の靈魂観と宗教受容

はじめに

第1節 先行研究と問題の所在

第2節 「UTUX」

第3節 「GAYA」

第4節 「UTUX」と基督教（プロテスタント）

おわりに

第五章 セデック族文化から大衆文化へ

はじめに

第1節 先行研究と課題設置

第2節 映画『セデック・バレ』

第3節 ソニックの「セイディク・バレイ」三部作

おわりに

終章

第1節 伝統部落時代から日本統治時代前中期—喪失した民族アイデンティティー

第2節 皇民化教育と高砂義勇隊—国家アイデンティティーの確立

第3節 政権交替、基督教の伝来と現在—宗教アイデンティティーの確立と民族アイデンティティーの再確立

本論文の研究方法とその視点は、文献研究、実地調査、聞き取り調査と映画あるいは音楽など相関文化作品の研究を通じ、中国大陸と台湾の中国語文献、外国語文献の中国語訳版、日本の日本語文献、外国語文献の日本語訳版を中心に、多元的な視点から文献研究を行い、セデック族が多く住む清流部落及び霧社地区などでの実地調査とセデック族への聞き取り調査、そしてセデック族をモチーフにした映画、ドキュメンタリー、音楽など様々な形の文化作品を研究し、多角的にセデック族を研究することを試みている。

本論文は「序章」、「終章」と5つの章、合計7つの部分で構成される。「序章」の部分では研究背景と問題の所在、研究目的、先行研究、研究の視点と方法、調査地の選定、概況と論文構成をそれぞれに紹介した。

第一章ではセデック族の民族識別問題を中心に、広く台湾原住民全体の正名運動の経緯から台湾社会における台湾原住民の民族識別問題を鳥瞰し、清朝期、日本統治時期と戦後期という3つ時期

に分けて、それぞれの時期においてセデック族をどのような形態で分類・識別してきたか系統的に考察した。日本統治時代ではセデック族はタイヤル族の支族として取り扱われたが、タイヤル族とセデック族の言語、自称用語、「石生」、「木生」の起源伝説などの文化の相違点により、セデック族、タイヤル族、タロコ族の関係を再検討した。また、セデック族の民族認定が成功した後の諸社会問題に着目し、セデック族の自称用語により生じた民族名称選定問題、エスニックな姓名制度により生じた伝統姓名登録問題と伝統姓名表記問題の現状とその原因の考察を行った。

第二章では、聞き取り調査と日本統治時代の『蕃族調査研究報告書』を中心とする文献調査を基に、セデック族の出草（首狩り）の風習について再検討した。セデック族の出草風習の「豊穡をもたらす、悪疫の流行を払う」、「防御、領域の完備性を守る」、「成人式」と「矛盾の解決手段」という4つの主な目的を中心に、出草の理由と目的を考察した。セデック族タックダヤ語群の出草風習の起源伝説を中心に各語群を比較し、そして今現在の口述記録と比較分析を行った。出草の対象の選択基準からセデック族を「社群」、「部落」を単位とした群体意識、「首」そのものの機能性と霊力、相関の道具と出草の実行における「夢占い」、「鳥占い」という先決条件、「首」に対する処分の方法、成功と失敗の場合それぞれの流れと相関のタブーに対して考察した。その結果、出草の風習はセデック族男性に対する重要な意義を持ち、セデック族にとって単なる殺人行為ではなく、部落の関係を調和する、秩序を維持する重要な手段であることを論じた。また、出草の風習に含まれる伝統的な観念が、ほかの形へ転化していくことに対しても考察を試みた。

第三章では、セデック族の伝統的な文面の条件や施行の流れ、タブー、器具を系統的にまとめ、さらに、セデック族の文面の起源伝説に対する分析を行った。そして、タイヤル族やタロコ族の文面紋様との比較研究を行った。また、清流部落を調査地として、セデック族の文面文化の復興現状とセデック人の態度、特に文面の復興に対して批判的態度をもつセデック人の考えや意識を明らかにした。最後に、伝統的な部落時代における文面の意義とその変容に対しても考察を試みた。

第四章では広くセデック族の宇宙観と生死観から入り、教義が確立された「世界宗教」と異なるセデック族の「UTUX」という霊魂観とエスニックなルール「GAYA」に注目した。「UTUX」という概念の「霊魂」、「鬼魂」、「祖霊」、「万物を編む創造神」などの多重の意味、「UTUX」の善と悪、セデック語における「UTUX」という単語の複雑な性質を考察した。清流部落を主な調査地として、「UTUX」の霊魂観をもち、「GAYA」を守ってきたセデック族が、どのように基督教（プロテスタント）を受け入れたのかという問題を取り上げた。具体的には、まずセデック族部落における基督教の伝道史と、長老教会の設立・発展を振り返った。次に、井上伊之助の台湾原住民医療伝道の中で指摘した基督教の教会集団原理と、タイヤル族・セデック族の「GAGA」および「GAYA」集団原理の共通性を検討した。最後に、セデック族の霊魂観と基督教の教義の比較分析を試みた。

第五章では、セデック族文化の芸術的な創作を通じて一般人にも興味を持たせ、理解させる、いわゆる大衆文化を論じた。主にセデック族タックダヤ語群の霧社事件をモチーフにした映画作品『セデック・バレ』と、台湾のロックバンド「ソニック」のアルバム「セイディク・バレイ三部作」の大衆文化作品に注目した。映画『セデック・バレ』と実際の霧社事件との異同を比較し、霧社事件から見えるセデック族の「GAYA」とイデオロギーを解読し、芸術的な角度から映画の全体を分析し、そして『餘生-セデック・バレの真実』という映画のドキュメンタリーも取り上げた。ソニックの「セイディク・バレイ」三部作の部分では、作品も叙事性と音楽表現を総合的に考察し、すなわち、各アルバムの各曲はどんな歴史を述べているのか、そして、歴史をどのような音楽的な手段で表現しているのかに対して考察を行った。また、こうしたセデック族に関する大衆文化作品の現状、そして、これらの大衆文化作品に対する考察を通じて、セデック族文化を一般人にも興味をもたせ、理解させる文化、いわゆる人を引き付ける特徴のある大衆文化で表現することの利害関係を検討した。

終章の部分では、前五章の考察を合わせて、民俗・文化とアイデンティティーの関係に対する検討を通じて、セデック族における伝統的な部落時代から現在までのアイデンティティーの形成、確立、喪失、再確立の変容過程を考察した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文を執筆した李干氏は、中国大陸出身者である。近年まで中国大陸出身の学生が台湾に行くことすらできない政治状況があった。しかし、現代はその状況が大きく変化し、李干氏は台湾でフィールドワークも行って本論文を作成した。しかも、台湾の少数民族であるセデック族を対象に、日本統治以前、日本統治時代、国民党時代そして現代と台湾の歴史を踏まえて、セデック族の文化そしてアイデンティティーの伝統、喪失、変化、再生を起草（首狩り）、文面（顔面入れ墨）、霊魂感、大衆文化について日本語文献や中国語文献をきちんとまとめ、かつ現地で数度にわたるフィールドワーク資料を駆使して検討したことは大きく評価できる。

台湾の近現代史を扱う際、どうしても日本および中国大陸との関連の中で台湾がどのような政治的、文化的位置づけにあったかを整理して論ずることが必要となる。セデック族は、1930年に起きた抗日武装蜂起とされる霧社事件の当事者であり、この事件を題材にした映画「セデック・バレー」を分析している点が本論文の一つの焦点である。歴史は主権者の立場から評価されることが多く、第二次世界大戦後の国民党政府からはこの事件は抗日行為として賛美されてきた。しかし、当事者であるセデック族の立場から「セデック・バレー」は描かれている点を本論文は指摘し、さらに霧社事件について映画と実際の違いを検討している。この研究視点は当事者であるセデック族の視点から霧社事件を再考し、さらに映画で描かれた事象と実際の事象を比較してその違いを明らかにしている点はいへん優れている。しかし、本論文は大衆文化論に論点移ったために霧社事件の本質をセデック族の霊魂感や道徳と関連させてさらに深く検討していくことが弱まった点に民俗学あるいは文化人類学の研究としては若干課題が残ったと言える。

セデック族の起草あるいは文面という習俗は、中国大陸における漢民族をはじめその他の少数民族にはない習俗であり、むしろセデック族の源流としての東南アジアやマイクロネシアに普及していた習俗と言える。これらの習俗に対して中国大陸ではほとんど研究がなかったが、日本の研究そして台湾の研究をもとにセデック族の人々にとってそれらがどのような意味を持つのかを、文献だけでなく、インタビュー調査さらに物質文化も含めて調査した点は、セデック族の研究として重要であるし、中国大陸における台湾原住民の研究としても大きな貢献と言える。

起草（首狩り）習俗は、日本統治時代に禁止されてから約百年経過している。しかし、セデック族にとってそのエスニックなルールとしての GAYA と深く結びついたもので、その精神生活、群族観念、社会制度などと結びついた重要な行為であった。起草習俗を客観的に捉え、その行為の本質を単なる殺人行為にとらえるのではなく、部落の関係を調和させ、秩序を維持する重要な手段と分析した点は高く評価できる。ただ、現代のセデック族の人々にとって起草習俗はどのように認識されているか。年配者の観念と、若年者の観念は異なっており、この点に関するさらなる調査が期待できる。

セデック族は、UTUX という、祖霊、鬼、神霊、幽霊を含む霊魂観を持っており、それが GAYA と呼ばれる「族律」、つまりセデック族の社会規範、法律、祖先の教えなどを含む慣習的な律法によって UTUX の霊魂観が存在していた。そのセデック族の基本的な宗教観念が、日本統治による近代化の中で揺らいできた。そこに、長老派基督教の宣教師が入り、戦後セデック族の多くは基督教に入信している。それは、単なる宣教の問題ではなく、セデック族が伝統的に持っていた UTUX の神

観念がキリスト教の一神教に相似しており、基督教の教義がセデック族の宗教に関する GAYA の存在に相似していること、さらに父・子・霊の三位一体がセデック族の信仰に対応している点などを指摘した。本論文では、セデック族の宗教観念と基督教の宗教観念の対応性を分析した点は、独特な宗教観念の研究として高く評価される。

李干氏の本論文は、台湾原住民族であるセデック族の民族性を歴史的に検討し、その文化変容を分析するとともに、現代のセデック族の文化変容とその文化アイデンティティとの関連を研究した好論文である。したがって、審査の結果、本論文は博士（歴史民俗資料学）の学位を授与するにふさわしいことが、審査員一同によって認定された。